

私とインドネシアの教育の未来

アルビ スルヤ サトリヤ リドワン
ARBI SURYA SATRIA RIDWAN

はじめまして。夢の中にいるインドネシアの青年、アルビ・スルヤです。私はインドネシアのヨギャカルタという地方で生まれ育ちました。それは多数の文化や物語、思い出のある街です。私は現在、熊本大学で建築の博士課程を勉強しています。夢とは何かと語ると、長いものになるでしょう。

私はヨギャカルタという地方で生まれ育ちました。子供の頃から、両親はいつも私に夢とそれを実現するための過程や苦労などについて教えてくれました。私は発展途上国であるインドネシアに住んでおり、すべてのインフラは日本ほど便利ではありません。母国インドネシアは国民の中でも多くの社会的格差があります。私が住んでいる地域では家庭の経済的問題のため、毎日ご飯を食べることが難しい家庭と学校を中退する人が多くみられました。

そのことを思い出すと、私はとても幸運な子であることを改めて思いました。しかし、その背後には、将来への大きな夢があります。私は建築、被災後の都市再建と障害児に興味を持っています。そして今でも、私の国であるインドネシアは、生産年齢の数が非生産年齢の数よりも多い「人口統計学的ボーナス」と呼ばれるものを経験しています。これは今の日本とは正反対です。私は現在インドネシアの人口統計ボーナスにいる若者の一人であることを認識しています。しかし、日本に留学する幸運な若者の一人である私は、インドネシアにどのような貢献ができるでしょうか。

インドネシア人として、私の国は日本ほど発展していないことをよく知っています。社会的不平等、学校を中退する子供たち、そして時には貧困の中で暮らす多くの家族など、まだ多くの社会的問題があります。それらの多くは、毎日食べることにさえ混乱しています。そのことを思い出した際に、私はいつも悲しくなり、私の国にとっては小さな変化に過ぎませんが、彼らを助け、インドネシアに貢献するという大きな夢を持っているという気持ちが常にあります。

中学生の頃は、アンコットという公共交通機関を利用して通学することが多くありました。このアンコットは、すべての人が乗れる公共の乗り物です。しかし、中では騒がしいので、状況が非常に異なります。このアンコットに乗った私はいつも豆腐、果物、野菜、山羊を持って来る商人たちと一緒に座っていました。彼らは市場から帰ったのです。彼らは作物を市場に売る農家であり、彼らの人生は限られていることを知っていました。しかし、私がいつも彼らから学ぶことが1つあります。彼らはいつも笑顔で、車内の他の人を話すように誘います。農家の叔母さんたちと私は知り合いではありませんでしたが、出会った彼らがいつも私に話かけてくれ、優しく微笑んでくれました。

日本政府から奨学金を得たので、今日本で勉強しています。私の状況はインドネシアの他の人と比較して非常に幸運であることを本当に理解しています。日本での教育を終えた後、インドネシア

に戻り、教育の分野で国の発展に貢献したいと思っています。私は本当に大学の講師になり、日本にいる間に得た知識をインドネシアの若い世代に教えたいと思っています。私は教育を通じて彼らを貧困から救うことを助けたいと思っています。なぜなら、知識は、一生懸命働く人々にとって、将来、彼らとその家族の運命を変えることができるからです。

建築の教育を通して、私はまた、追求したいもう一つの大きな夢を持っています。恵まれない地域の子供たちのために学校を建て、教育支援を提供して、将来、彼らが貧困から抜け出し、他の子供たちと同じように平等になることができるようにしたいと思います。なぜなら、私の小さな心の中で、学校を中退して物乞いや道端で飲食料品を売る子供たちを見ると、いつも悲しくなります。いつの日か夢が叶うように、寝る前に毎晩祈っています。

今でも熊本大学の教育講師の指導や障害児に関するボランティア活動など、さまざまな社会活動に励んでいます。私は子供が大好きです。私が達成したいもう1つの夢は、インドネシアの他の普通の子供と同じように平等になるために、インドネシアの障害者の権利のために闘いたいということです。また、インドネシアの障害児は自立して、普通の子どものようにたくさんのことを学ばせてほしいです。日本は常にすべての人に平等を提供しようと努めてきました。私はまた、インドネシアに戻った後、私の国に大きな貢献をする若いインドネシア人の一人になりたいです。

最後に私から、夢は一晩では得られません。しかし、その背後には常に過程があります。日本からたくさんのことを学びたいし、いつかインドネシアを日本のように発展させたいです。インドネシアの皆さんも同じく、平等と教育が受けられることを祈っています。